

茨城県におけるカワシンジュガイ属 2 種の確認とその背景

○望月健太郎・藤田 衛・米田壮伸・飯島雅知・上地健琉（近大バスバスターズ）

国内外来種は多種との競合や同種間での遺伝子汚染の問題以外に、希少種における導入以前の在来生息地での乱獲による影響も懸念されている(金尾, 2013). タナゴ亜科魚類はその最たる例で、拡散要因に観賞目的で流通や採集された個体の遺棄が原因と考えられる事例も報告されている(三宅・河村, 2013). その背景にはタナゴ亜科魚類の観賞魚や釣魚としての人気があるものと思われる. タナゴ亜科魚類はイシガイ目貝類を産卵母貝として利用する生態を持っており、減少要因の 1 つに産卵母貝の減少もあげられる. タナゴ亜科魚類とイシガイ目貝類はともに絶滅の危機に瀕しており、ほとんどの種が環境省版レッドリストに掲載されている現状にある.

2019 年 9 月に茨城県の 2 水系からカワシンジュガイ属貝類の生貝と死貝が得られた. 殻形態に基づき同定したところ、カワシンジュガイとコガタカワシンジュガイにそれぞれ同定された. 環境省レッドリストにおいてカワシンジュガイが絶滅危惧Ⅱ類、コガタカワシンジュガイが絶滅危惧Ⅰ類にそれぞれ指定されている. またカワシンジュガイは今回確認された水系から記録がなく、コガタカワシンジュガイは茨城県内から初めての記録となる. しかし確認された地点の水温が 28.8℃, 26.5℃と高かったこと、宿主となるサケ科魚類が確認できなかったこと、国内外来種であるカネヒラが確認されたことなどから、本調査で確認されたカワシンジュガイ属は移入由来である可能性が高いと考えられた. 本属貝類はタナゴ亜科魚類の増殖目的の産卵母貝に有用として用いられることが多い(秋山ほか, 1994; 赤井ほか, 2004). このことから今回確認されたカワシンジュガイ属貝類はタナゴ亜科魚類の産卵母貝目的で持ち込まれた可能性が示唆され、在来生息地での影響が懸念された. 本発表では移入経緯の考察やその背景について事例を交えて報告する.



図 1. 確認されたカワシンジュガイ



図 2. 同所で確認されたカネヒラ